

原発事故後における農業再生の試み

○溝口 勝

東京大学大学院農学生命科学研究科教授（国際情報農学研究室）

認定NPO 法人ふくしま再生の会理事

原発事故後に全村避難が続いている福島県飯舘村では毎日数千人規模で除染が進められ、仮仮置場となった農地が黒いフレコンバックで覆われつつある（写真1）。表土が削り取られた農地には山砂が客土され、あちこちにテニスコートのようなグラウンドが出現している（写真2）。この光景は農民の農業再生意欲と村民の帰村意欲をそぎ落としかねない。私は原発事故の3か月後から飯舘村の現場に赴き、NPO 法人と協働で農民自身できる農地除染法（写真3）を開発し、イネの栽培試験を重ねてきた。そして、2014年に福島県のコメ全袋全量検査をパスするまでになった（写真4）。この間、現実を自分の目で確かめてもらい風評被害を軽減するために学生を対象にした現場見学会も実施した。こうした一連の活動を通して、地域再生を考える上で最も重要なのは、放射能汚染地というハンデを逆手にとって新しい日本型農業の創設にチャレンジする若者を育成することではないかと思いつけている。

このシンポジウムでは、私たちが飯舘村で取り組んできた農地除染の現場実験やイネの栽培試験を紹介しながら、農業再生のために農学分野として取り組むべき課題について述べる。



写真1 仮仮置場に山積みの汚染土



写真2 山砂で置換された農地の表土



写真3 農地除染法の開発



写真4 栽培試験地での稲刈り